

ワぷる

さっぽろ

特集

女性のチャレンジ

さっぽろ ひと つながり

「企業内託児所」開設 インタビュー



「テレワーク」で人生の選択肢を広げたい

「この子を産み、育てることが、今の私にとって一番やるべきこと」産婦人科のベッドの上でお腹に手をあてながら、私は6年半勤めた会社を辞める決意をしました。当時、私は29歳。大手電機メーカーに勤め、朝から晩まで仕事一筋で働いていました。しかし、初めての赤ちゃんを授かり、妊娠5カ月の時に、突然の腹痛に見舞われ緊急入院をしたのです。子宮嚢腫の可能性があり、医師から「手術したら赤ちゃんの命は保証できない」と言われました。手術をせずに自宅安静で退院できたのですが、この時の決心が、私のそれからの人生の始まりになったのです。

女性が働き続けるときの「壁」

女性が働き続けようとする、「結婚」「出産」「育児」「夫の転勤」「介護」など、さまざまな「壁」にぶつかることがあります。もちろん、女性だけが背負うべきことではありません。しかし、日本の社会においては、こういった状況下で「仕事を辞めるのは女性だ」という雰囲気がありました。

私自身は、女性の地位向上を声高に主張するタイプではありません。男性と女性には、神様が決めた違いがあります。それを無視して、すべてにおいて同じ条件である必要はないと思っています。しかし、「女性だからこうすべき」という発想には抵抗があります。男性も女性も同じ人間であり、それぞれの個性や趣向がある。家事や育児をしたい男性や、仕事を続けたい女性がいても何も不思議ではない。性別によって人生の選択肢が狭くな

株式会社 ワイズスタッフ

田澤由利 さん

(たざわ ゆり)



上智大学外国語学部卒業。1998年に通信情報機器等を活用し、時間や場所に制約されずに仕事をするテレワーク（Telework）という労働形態の「ネットオフィス」を実践するためにワイズスタッフを設立。

女性はもちろん、地方在住者、高齢者、障がい者も「ネットで働ける社会」の実現をライフワークとして取り組んでいる。

るのは納得できません。

そんな私が、働き続ける「壁」を前にして考えたのは、無理をしないこと、そして、あきらめないことでした。その上で、壁と上手に付き合う方法を探してみよう。無理をして壁を壊すと、まわりの人を困らせるかもしれないし、私自身も壊れてしまうかもしれない。でも、あきらめたくない。無理せず、「壁」を壊す以外の選択肢を探すこと、それが、私の選んだ生き方だったのです。

子どもがいても、転勤族の妻でも働きたい！

さて、冒頭の決意から、私は後ろ髪を引かれる思いで会社を退職しました。本当は辞めたくなかった会社。しかし、自分にとって一番大切なことは、子どもを産むこと。働き続ける道は他にも必ずあるはずだ、そう自分に言い聞かせました。

大きくなるお腹を抱えながら、子どもがいても、夫の転勤があっても働き続けるためにはどうしたらいいか考え続けました。そして、「パソコン記事のライター」という職業を思いついたのです。パソコンの商品企画を担当していたスキルを生かして家で原稿を書き、メールで東京の編集部へ送る。これなら、どこに住んでいても働き続けることができるかもしれない。

もちろん、そんな都合のいい仕事はすぐに見つかりません。記事の企画書を作り、パソコン関連の出版社に電話とメールとファックスでアプローチし続けました。そして、初心者向けパソコン雑誌の女性編集長と知り合い、何度もアタックした結果、「連載記事執筆」の仕事を手

に入れました。その依頼を受けたのは、長女出産の直前、切迫早産で入院していた産婦人科のベッドの上。どういふ状況であっても思いがあれば道は開けるのです。

「家で働く」というワークスタイル

新米ママでありながらフリーライターとなった私は、夫の転勤で大阪、岡山、名古屋、北海道と転居を繰り返し、また、次女、三女を出産する中で仕事を続けました。自宅とはいえ、3人のヤンチャ娘がそばにいては仕事はかどりません。昼間は保育園にお世話になり、夜は寝る間を惜しんで原稿を書きました。その当時、辛いと感じたことはありませんでした。会社を退職後、仕事が見つからず、社会と切り離された感覚に襲われていた頃と比べたら、忙しいほうが、社会から必要とされるほうが幸せでした。パソコンという今までにない新しい道具と、「家で働く」というワークスタイルのおかげでした。

「ネットで働ける会社」を北海道で起業

1997年秋、夫の5度目の転勤で北海道の北見市に移り住みました。子どもたちは、5歳、2歳、生後5カ月。知り合いもいない中で途方にくれつつも、次第に北海道での生活に魅了されていきました。

その頃、日本ではインターネットが普及し始め、「在宅ワーク」「SOHO(スモールオフィスホームオフィス)」という言葉がマスコミを賑わし始めていました。私のそれまでの働き方とオーバーラップし、「北の地で、インターネットを使い在宅で働く3人娘の母」としての取材が増え、雑誌・新聞・テレビなどメディアへの露出が多くなりました。この頃から「私も家で仕事がしたい」という女性の声为全国から届くようになったのです。

私は在宅で仕事をし、ライターとして実績を積むことができ、いろいろな意味でラッキーだったと思います。しかし現実には、マスコミで騒がれているほど自宅で仕事をしている女性は多くなく、新しい働き方は「絵に描いた餅」になりかねない状況でした。

仕事をしたい人がいても、在宅ワーカーやSOHOに仕事を発注する企業が少ない。わずかにあるデータ入力やテープ起こしの仕事は、需要と供給のバランスが崩れ、単価が下がり、仕事の質も低下、発注自体が減るといふ悪循環。更に、家で仕事をしたい女性に高額な教材を売

りつける悪徳業者まで出てきました。

このままでは私を助けてくれたワークスタイルが普及しない。在宅ワーカーやSOHOに仕事の依頼がないのは、発注者の企業が安心して依頼できる体制と信用がないからだ。だったらそれを私が作ればいい。「インターネット上に限りなく『会社』に近い、働く場所を作ろう。そして、本気で働きたい人材を集めてビジネスにしよう」と98年秋、「ワイズスタッフ」を設立したのです。

現在ワイズスタッフは、日本全国各地、そして海外にも及ぶ100名以上のスタッフと共に、インターネット上でプロジェクトを組み、ホームページの制作・運営、インターネットでのプロモーションなどの業務を行っています。都心部にあるIT企業ほどの極端な伸びではありませんが、コツコツ売り上げを増やしています。会社に通わなくても、「人材」「しくみ」「道具」が揃えば、良い仕事ができることを証明したいとの思いは起業当初から変わりません。子育て中の女性に限らず、地方在住者、高齢者も、情報通信機器等を活用した「テレワーク」といふ労働形態が実現すれば働く選択肢が広がるのです。

夫が会社を辞めて北見で暮らす

最近思うことは、女性はすべてに対して「頑張りすぎる」ということです。家庭も、仕事も、子育ても完璧に、なんてそうそうできることではありません。壁に出合った時、まじめな人ほど、どうやって壁を乗り越えるかと悩みつつ、真正面からぶつかってしまいます。そんな時は、ちょっと深呼吸してまわりを見まわしてみませんか？もしかしたら、小さな抜け穴があるかもしれません。あるいは壁とは違う方向に別の道が続いているかも。

北見に暮らして2年経った頃、転勤族ですが小さな家を建てました。家族全員が北見での生活を気に入り、また転勤しても帰りたいという思いからでした。新築してすぐに東京への転勤辞令があり、悩んだ末に夫は単身赴任をしました。しかし、10カ月後に「やはり北見で家族と暮らしたい」と会社を辞めて帰ってきたのです！夫の転勤についていくために会社を退職した私だったのに、人生には何が起こるかわりません。

しなやかに生きるための「人生の選択肢」

こんな私ですから、楽天主義とか計画性がないとよく言われてしまいます。でもある友人が、こう言ってくれました。「由利はしなやかに生きているね」その言葉に、救われる思いがしました。人生はいろいろなことがある、でも、無理せずにしなやかに生きたい。そして、多くの人にも、しなやかに生きる道を見つけてほしい。その選択肢を増やすため、私は「テレワーク」という新しい働

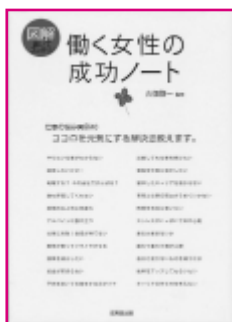
き方をもっと広めるのだと、強く思うようになったのです。

「テレワーク」は、すべての人にメリットのある働き方だとは思いません。会社に通勤して働き続けることができれば、それはそれでいいこと。でも、何らかの理由で通勤できない時「テレワーク」が可能であれば、「人生の選択肢」が増えるはず。そう信じて私の挑戦は、これからも続きます。

情報センターから関連図書のご案内

『図解 働く女性の成功ノート』

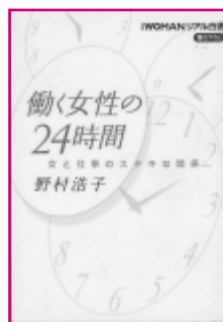
監修者 久恒 啓一
出版社 成美堂出版
出版年 2006年



仕事、結婚、子育てなどいろいろな場面で起こる悩みや迷い、思いを図にして考え、夢を実現させるための成功ノート。各テーマとも、進藤晶子氏、香山リカ氏、など各界で活躍している女性たちの、岐路に立ったときの悩みや思いをどう解決していったかを図にして紹介。あわせて実際に自分で書き込めるシートについても解説。監修は、『図で考える人の習慣』などヒット作を多数出した久恒啓一氏。

『働く女性の24時間 女と仕事のステキな関係(日経ビジネス ス人文庫 日経WOMANリアル白書)』

著者名 野村 浩子
出版社 日本経済新聞出版社
出版年 2005年



稼ぎはソコソコでも、仕事と私生活のバランスを優先。彼や夫がいても、自分を癒す「ひとり時間」は譲れない。「日経ウーマン」編集長が、働く女性の等身大の姿や本音を軽やかに描いた、初の書き下ろしエッセイ。(日本経済新聞出版社コメントより)

情報センターから のお知らせ

情報センターは、札幌エルプラザ公共4施設（男女共同参画センター、消費者センター、市民活動サポートセンター、環境プラザ）の図書室です。

情報センターでは、男女共同参画、消費生活、市民活動、環境に関する図書やビデオ等の資料の閲覧や貸出ができます。また、4分野に関する情報をパソコンを使って調べることができます。どうぞご利用ください。

❖ 「不明本」に関するお願い

平成18年11月18日(土)・19日(日)の臨時休館日に、情報センターで所蔵している図書の蔵書点検を実施しました。その結果、行方の分からない図書（不明本）が53冊あることが判明しました。不明本の中には、絶版のものもあり、手に入れることのできない貴重な図書もあります。貸出手続きをされないまま誤って資料を持ち出されている場合がございます。至急情報センターカウンターまでご返却ください。貸出・返却の際はカウンターでのお手続きをお願いします。

❖ ご利用時間のご案内

開館時間 9:00~20:00

貸出・受付 9:00~19:45

返却 9:00~20:00

情報センター閉館時（20:00~22:00及び図書整理日）は、情報センター入り口に設置している返却ボックスをご利用ください。視聴覚資料等は、総合案内までお持ちください。

情報センター（札幌エルプラザ1階）

Tel: 011-728-1223

<http://www.danjo.sl-plaza.jp/jyouhou>

男女共同参画センターのボランティア活動紹介

クリッピングボランティア

<DVクリッピング特集>

11月11日から25日の「女性に対する暴力をなくす運動」の期間中に、札幌市男女共同参画センター1階エントランスロビーで開催したパネル展でクリッピングボランティアが、これまでの活動の中からDV（ドメスティック・バイオレンス）に関連した記事を集め掲示しました。女性に対する暴力は身近な問題であることを伝え、“一人で悩まずに相談をして欲しい”との思いを込めました。



広報紙ボランティア

<広報紙『ピリカループ』創刊>

2月に広報紙ボランティアが広報紙『ピリカループ』を創刊しました。広報紙名「ピリカ=美しい」「ループ=輪・絆」は、男女共同参画社会の美しい輪・絆が広がるようにとボランティアが苦労の末に命名。今回は、ボランティアが体験した「ジェンダーワークショップ」の内容を記事にしました。ボランティアの視点で札幌市男女共同参画センターの主旨や活動状況を伝えています。当センターの他、札幌市内の公共施設等で配布していますので是非ご覧ください。



私たちが作成しています!

子育てサポートボランティア「ぼっぼ」

<親子サロン開催>

子育てサポートボランティア「ぼっぼ」が節分の行事として、2月2日に親子サロン「楽しい豆まきパーティー」を企画・実施しました。ボランティア全員で豆まき遊びに使用する大きな赤鬼、青鬼の人形の作成や、手遊びや読み聞かせの練習に取り組みました。当日はボランティア9名と24組の親子が参加。大きな鬼の人形に向かって豆まきをしたあとに「鬼のパンツ」を歌いながら体を動きました。親子で鬼の人形と一緒に記念写真をするなど、和やかな雰囲気ですべて無事に終了。参加者から「ぼっぼ」の行事をたくさん実施して欲しいとの声が聞かれました。



さっぽろ ひと つながり

このコーナーでは、さまざまな分野で男女共同参画社会の実現を目指して取り組んでいる「人」や「団体」を紹介しします。今回は、平成17年度に均等推進企業表彰「北海道労働局長賞」を受賞した<北洋銀行>の宮部裕司さんに「企業内託児所」の開設についてお話を伺いました。

<北洋銀行>は、大正6年8月に設立、平成19年8月に90周年を迎える。行員は3千名以上で北海道を基盤とする歴史ある地方銀行。平成18年4月に単独の建物の託児所「ほっくーとなかまたち」を開設しました。



みやべゆうじ
宮部裕司さん
(北洋銀行 業務推進部 業務推進役)

Q 託児所の開設のきっかけを教えてください。

A 行内でも少子高齢化の課題があり、出産・子育てを理由とした女性の退職者が多く、高いスキルと継続就労を目指す人材の確保は大きな課題と考えていました。平成11年頃から、女性が出産後も退職せずに育児休業を取りたいとの要望が増え、それにあわせて行内としても復職希望の女性を支援しようと積極的に考えるようになりました。そこで平成18年4月に高向頭取（現会長）の意向を受け、企業内託児所の開設となりました。

Q 開設の苦労などはありましたか。

A 私は業務推進部で、福祉・介護・医療を担当し、託児所の開設については何も分からない状況から始めたので、数十箇所の保育園の視察を行う等大変な作業でした。業務提携パートナーの株式会社ほくやくUDIの協力も頂きました。

Q 託児所の利用等はどのようになっていますか。

A 利用者は当行職員であれば誰でも利用でき、男性や嘱託・パート職員も利用できます。実際に現在男性行員も利用しています。利用時間は、銀行営業日の午前7時30分から午後7時。利用年齢は生後7カ月から小学校就学まで。定員数は30名で、認可保育所の基準を満たしています。利用料金は一般職で3万円、緊急に託児が必要な場合等のデューズは1日3千円。食事は、施設内で作る完全給食です。

Q 託児所が開設になり、行員の反応や意識の変化はありましたか。

A 利用者には保育内容・設備等については喜んでもらえていると感じています。設置の効果として女性行員の職場復帰も増加しています。また、利用者以外の当行託児所への関心は高く、問合せも多くあります。女性も男性も同じように働ける環境が整うことで、男女平等の意識が育ち、行内のモラル向上に良い影響があるのではないかと思います。

Q 託児所開設の利点と今後の展望を教えてください。

A 託児所は非常にコストがかかりますが、将来的に企業全体の発展に繋がると考えています。将来的には道内数箇所に開設を考えており、希望していただける企業があれば協同運営も考えていきたいと思っています。

Q 託児所以外で仕事と子育ての両立に関する支援制度や措置はありますか？

A 育児・介護休業法の施行に伴い、「看護休暇」を有給（特別休暇）で導入しています。年次有給休暇しかなかった頃に比べ、取得しやすいとの声があります。また、男性行員には、配偶者の出産時に5日間の特別有給休暇があります。

Q 平成17年度に均等推進企業表彰「北海道労働局長賞」を受賞されましたが、これまでの男女間の格差是正の取組みを教えてください。

A 均等推進はここ10年程度の取組みですが、女性の採用拡大、職域の拡大、管理職登用、環境整備の4点で実施しました。職域の拡大という点では、従来女性がいなかった部門へ女性の配置を行いました。環境整備では、「女性は制服を着て窓口業務」という男女双方の固定観念をなくす目的で制服の廃止を行いました。管理職登用は、数値目標を定め、特別研修を実施しました。男女同等の意識が企業・行員全体に浸透するには、まだ時間を要しますが、一歩ずつ前進していこうと思っています。

Q 職場環境を整えることは、行員にも企業にもメリットは大きいと思いますが、特に雇用者側のメリットを教えてください。

A CSR¹の観点からも、ステークホルダー（利害関係者）である行員の働きやすさを考えることは企業として当然のことです。少子高齢化の時代で、女性・男性という性別とは関係なく、優秀な人材を確保し、能力を十分に発揮してもらうために、雇用者側は職場環境を整えることが必要です。そうすることが企業全体、さらには北海道全体の発展に繋がるのではないのでしょうか。

¹ CSR (Corporate Social Responsibility) とは、企業の社会に対する責任という意味。CSRは、持続可能な社会を目指すためには、行政、民間、非営利団体のみならず、企業も経済だけではなく社会や環境などの要素にも責任を持つべきであるとの考えのもとに成立した概念。

数字にみる

男女共同参画

札幌市の女性
従業者の「正規の
職員・従業員」の
割合

38.01%

札幌市の女性従業者の「正規の職員・従業員」の割合です(表1)。これに対し、パート・派遣社員等の「非正規の職員・従業員」は50.08%と約半数を占めています。しかし、男性従業者は「正規の職員・従業員」が66.50%と高く「非正規の職員・従業員」が14.99%と低い割合になっています。

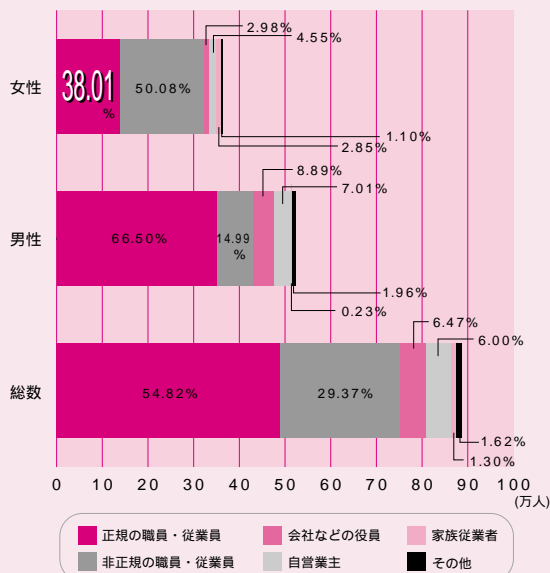
また、「正規の職員・従業員」と「非正規の職員・従業員」の割合を年代別に見ると、男性の「正規の職員・従業員」の割合は25～59歳のすべての年代で約7割の高い水準であることが分かります。一方、女性は35～39歳を境に「正規の職員・従業員」と「非正規の職員・従業員」の割合が逆転しており、2割から6割の間で年齢よっての増減がみられます(表2)。

このように、多くの男性は従業上の地位の変化なく安定して「正規の職員・従業員」として働きつづけているのに対し、女性は従業上の地位が年齢によって変化していることが伺えます。「女性は結婚・出産を機に退職するもの」「家事・育児・介護などは女性が担うもの」という固定観念から、女性は退職や雇用形態の変更を余儀なくされ、安定した就労が困難であると言えるのではないのでしょうか。

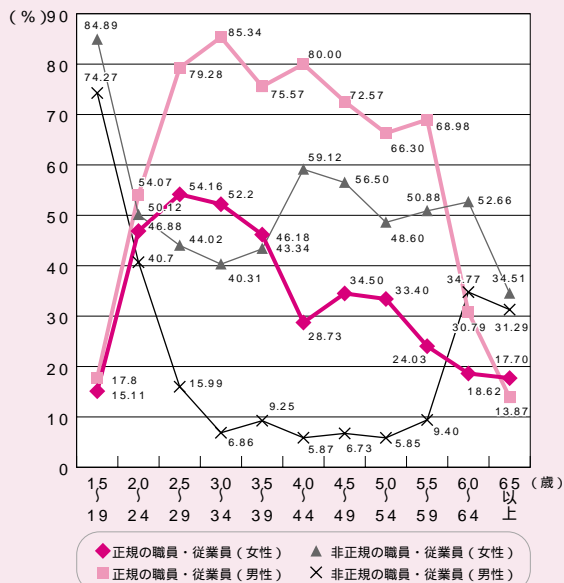
「家事」「育児」「介護」等は、女性だけが負担をしいられるものではなく、男女ともに担うべきライフスタイルに重要な要素です。男女ともに仕事も家事・育児・介護も行うという意識を持ち、互いに協力していくことが必要ではないのでしょうか。

参考：札幌市統計情報『就業構造基本調査』(平成14年)

【表1】従業上の地位、雇用形態



【表2】男女別 正規の職員・非正規の職員の割合



札幌市男女共同参画センター相談窓口のご案内

新たな一歩を踏み出すきっかけとしてご利用ください。相談は無料です。

| 相談窓口の種類 | 実施時間及び曜日 | 相談受付電話番号 |
|---------|---|--------------------------------|
| 女性のための | 総合相談 火 15:00~17:00 (第2火18:00~20:00) 木 10:00~12:00 土 10:00~12:00 | 728-1225 (面接・電話) |
| | 法律相談 金 13:00~15:00(要予約) (第2金18:00~20:00) | 予約電話 728-1255 (面接/一人30分) |
| | 心とからだ相談 火 14:00~16:00(要予約) (第1~3火 精神・神経科医、心理士 第4火 助産師) | 予約電話 728-1255 (面接/一人50分) |
| | 仕事の悩み相談 水(第1・3・5水13:00~17:00) (第2・4水16:00~20:00) | 728-1227 (面接・電話) |
| 男女の人権相談 | 月 10:00~12:00 | 728-1226 (面接・電話) |

気になる言葉

せっきょくてきかいぜんそち
「積極的改善措置(ポジティブアクション)」

「積極的改善措置(ポジティブアクション)」とは、過去の経緯や固定的な性別による役割分担意識などが原因で、男女間に事実上生じている格差を解消しようというものです。男女のどちらかが能力を發揮しにくい環境におかれている場合に、必要な範囲内において、男女の一方に対して、活動に参画する機会を積極的に提供していく取組です。現状では、政策・方針決定過程への女性の参画が著しく少なく、女性の活躍の場が少ないことから、女性を対象にした積極的改善措置が多くとられています。例えば、国の審議会等委員への女性の登用のための目標設定や、女性国家公務員の採用・登用の促進が実施されています。また、教育、経済、政治や雇用面においても女性が登用されるよう、優先的な処遇や割り当て制等の特別措置の活用を推進しています。女性に対する優先的な情報や研修の機会の提供等もこの一例です。これを機に男女間の格差解消が進むことを期待したいものです。

札幌市男女共同参画センター主催事業のお知らせ

女性のための再就職準備講座（全14回）

再就職を希望する女性を対象に、男女共同参画等の知識、就労に役立つ初級のパソコン（ワード・エクセル）操作、自分自身の経験・能力等を振り返る学習会を併せた講座です。スキルアップ・マインドアップの両方を学び、就職の意識を高めて再チャレンジしてみませんか？

実施日時：平成19年5月8日、9日、10日、
6月1日 午前10時～正午（講義全4回）
平成19年5月15日、18日、22日、
25日、29日、6月5日、8日、
12日、15日、19日（パソコン全10回）
【午前コース】10：30～12：00
【午後コース】13：30～15：00

対象：札幌市内に居住もしくは勤務し再就職を希望する女性
定員：40名（午前・午後コース各20名）
受講料：13,700円

申込み方法：往復ハガキで申込み。氏名、住所、電話番号、年代、託児の有無（託児希望の方は子どもの月齢）、パソコンの希望コース（午前か午後）、応募の動機を記入。
また、返信用ハガキに住所、氏名を記入してください。4月19日（休）必着。
申込多数時は抽選となり、4月22日（日）までにハガキにて結果を通知します。

申込み先：札幌市男女共同参画センター
（指定管理者：札幌市青少年女性活動協会）
札幌市北区北8条西3丁目札幌エルプラザ内
TEL 011-728-1255
FAX 011-728-1229

託児：1歳以上未就学児童
（講座申込みと同時に受付）

講座のお問い合わせは、札幌市男女共同参画センターで受け付けします。（TEL：728-1255札幌エルプラザ公共4施設事業係までご連絡ください）
受付時間：8：45～20：00

事業が終了しました

H19.1.31 / 2.7実施

心とからだセミナー 全2回

女性の“生きづらさ”を考える
『わたし』を大切にしたいパートナー関係

札幌市男女共同参画センターでは、女性のための総合相談や心とからだ相談において、女性の抱える悩みに対応しています。その悩みの中で、夫婦や家族など身近な人間関係における不安感を訴える相談が多く見られるため、「女性の“生きづらさ”を考える～『わたし』を大切にしたいパートナー関係」を開催しました。NPO法人リカバリー代表の大嶋栄子さんを講師に迎え、女性が貧困や格差といった“生きづらさ”を被りやすい社会のシステムや体制にも目を向けていくことなどを学びました。また、二者関係というのは、支配や依存の形に変化しやすいという問題がある一方で、すべての人間関係の出発でもあることを知り、言葉のコミュニケーション方法について考えました。

編集後記

今回「さっぼる ひと つながり」のインタビューでは、企業内託児所取材しました。託児所内を案内していただき、プレイルーム等に置いてあるぬいぐるみや、壁面の飾り付けが整っていてとても楽しい雰囲気でした。伺った時間は、子どもたちのお昼寝の時間だったので遊んでいる姿を見ることができなくて残念でした。女性、男性いずれも子育てしながら働き続けられる環境が増えていくことを期待したいです。

お便りお待ちしております

本誌のご感想、主催事業・施設利用に関するご意見をお待ちしています。はがき、封書、FAX等で、住所、氏名、電話番号をご記入のうえ札幌市男女共同参画センター「りぶる さっぼる」係までご送付ください。（いただいた個人情報、札幌市男女共同参画センター「りぶる さっぼる」の制作の目的以外に無断で利用することや第三者に提供することはありません）

発行月：平成19年3月
発行：札幌市男女共同参画センター
指定管理者：財団法人札幌市青少年女性活動協会
所在地：〒060-0808
札幌市北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ内
電話：(011)728-1255
札幌エルプラザ公共4施設事業係
FAX：(011)728-1229
ホームページ：http://www.danryo.sl-plaza.jp

本誌のタイトル「りぶる」は、英語でripple(りぶる)「さざ波」という意味です。男女共同参画の意識がさざ波のように、少しずつ広がって欲しいという思いを込めました。